



Data 2022-29

監督・脚本: アンソニー・ミンゲラ
原作: マイケル・オンダーチェ『イギリス人の患者』
出演: レイフ・ファインズ/クリス
ティン・スコット・トーマス
/ジュリエット・ピノシュ/
ウィレム・デフォー/ナヴィ
ーン・アンドリュース/コリ
ン・ファース/ジュリアン・
ワダム/ユルゲン・プロホノ
フ

👁️👁️ みどころ

『風と共に去りぬ』(39年)は大スクリーンで三度鑑賞したが、そんな経験は少ない。しかして、『イングリッシュ・ペイシエント』(96年)を「午前十時の映画祭」の大スクリーンで25年ぶりに再鑑賞。

大スクリーンで観た映画の感動は25年経っても変わらない。あの時の感動そのままに、チョー複雑だった物語の理解も、今回はバッチリ！イングリッシュ・ペイシエントって一体ナニ？なぜ3つも4つもの物語が同時並行的に描かれていたの？

『アラビアのロレンス』(62年)とは少し違う意味で、第2次世界大戦中の北アフリカを巡る軍事情勢をしっかりと理解しながら、切ない大人のラブストーリーをたっぷり堪能したい。

もっとも、恋のためなら軍の重要機密である地図をタダでくれてやることの是非は冷静に考えたい。本当はそんなことは許されないのかも・・・？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■午前十時の映画祭でこんな名作を25年ぶりに再鑑賞！■□■

2010年2月に始まった「午前十時の映画祭」は大好評で、今や、「午前十時の映画祭11」を迎えている。2022年4月からは「午前十時の映画祭12」を迎えることになる。他方、2002年6月に始まった『SHOW HEY シネマルーム』の出版は既に49冊となり、2022年7月に『シネマ50』を出版すれば、20年間でちょうど50冊になる。

私が映画評論を書くようになったきっかけは、『シネマ1』の「はしがき」や「私の映画へのスタンス」を参照してもらいたいが、そこには1997年1月に『イングリッシュ・ペイシエント』(96年)を観たことによって、この時から明確に、「将来映画評論を書く

んだ。また、それで原稿料をもらうんだ。」という意識が生まれたことを書いている。また、そのラストには、「映画評論は、今後も私の趣味と実益を兼ねた分野として、是非拡大していきたいと考えています。」と書いているが、まさかそれが20年間50冊も続くとは考えていなかった。

しかして、2022年3月13日の今日、その原点に戻り、「午前十時の映画祭11」で『イングリッシュ・ペイシエント』を25年ぶりに再鑑賞することに。

■□■冒頭から魅力満開！しかし、このタイトルは何？■□■

私は今年1月26日に73歳の誕生日を迎えたから、人並みに記憶力の低下や物忘れ症状を自覚している。しかし、本作については、25年前に観た記憶がバッチリ！冒頭の謎めかしい筆の運びが、北アフリカの起伏に富みかつ陰影に富んだ砂漠を意味していることがわかると、その直後には、その上空を飛ぶ複葉機が機銃で撃ち落とされるシリアスなシーケンスが登場！これではこの複葉機の操縦者は即死！そう思ったが、いやいや、この操縦者こそが瀕死の状態で野戦病院に運び込まれた“イングリッシュ・ペイシエント”と呼ばれる男になるわけだ。

しかして、この男は一体、何者？「イングリッシュ・ペイシエント」と呼ばれていたのだから、きっと英国人だろうが、なぜ1944年というあの時期に一人であんなところを飛んでいたの？そこから北アフリカを舞台として『アラビアのロレンス』（62年）を彷彿させる第2次世界大戦秘話と、その中で生まれた『風と共に去りぬ』（39年）を彷彿させるラブストーリーが展開していくことに。

■□■男たちは北アフリカで一体何を？不倫ドラマの展開は？■□■

本作は身体中が焼けただけ、顔も原型をとどめないまま起き上がることすらできないイングリッシュ・ペイシエントが主人公だが、それを演じるのはイギリスが誇るハンサム俳優レイフ・ファインズ。近時は『キングスマン』シリーズでも大活躍だが、本作ではずっとそんな設定？そう思っていると、いやいや・・・。

今はイングリッシュ・ペイシエントになってしまったものの、操縦する複葉機が撃ち落とされる前のアルマシー（レイフ・ファインズ）は、ハンガリー貴族の家柄に生まれた冒険家だ。彼は英国地理学協会に所属し、サハラ砂漠で地図作りに携わっていたが、戦時体制下、わざわざそんなところに集まっているのはどんな面々？ひょっとして、その中にはスパイがうじゃうじゃいるのでは？『アラビアのロレンス』を観た限り、軍人のロレンスはかなりの変わり者だったが、本作に見るアルマシーも、かなりの変わり者、というより偏屈男・・・？

そんなアルマシーは、英国地理学協会のスポンサーとして、夫のジェフリー（コリン・ファース）と共にサハラ砂漠まで来ていた美しい人妻キャサリン（クリスティン・スコット・トーマス）に一目惚れしたようだから、ヤバい。しかして、夫がカイロに戻った時、2人はどんな楽しいひと時を？そして、この2人には以降どんな物語が展開していくの？

さらに、最後にはどんな運命が待ち構えているの？

■□物語の展開はこの看護婦との対話の中から！■□

2022年3月の今、TV上では毎日ロシアによるウクライナ侵攻の姿がリアルタイムで映し出されているが、長々と続くロシアの戦車部隊がウクライナ軍に攻撃されるシーンを見た時はビックリ。しかして、本作導入部にもそれと同じようなシーンが登場し、看護婦として従軍しているハナ（ジュリエット・ビノシュ）の親友が乗った車両が、砲弾を受けて死亡する姿が映し出される。自分の身近な者が次々と死んでいく運命に絶望したハナは、移動する部隊を離れて、爆弾で廃虚と化した修道院の中でイングリッシュ・ペイシエントと共に暮らす道を選んだが、あの当時そんな選択肢があったの？

私はその点に疑問があるが、本作では、この修道院におけるハナとイングリッシュ・ペイシエントとの“語らい”の中で、①イングリッシュ・ペイシエントになる前のアルマシーの英国地理学協会員としての活動と仲間たちとの確執、②夫に隠れた人妻キャサリンとアルマシーとの不倫の恋の展開が、回顧されながら描かれていくので、それに注目！

それが本作のメインストーリーだが、3時間近くの長尺になった本作では、ハナの前に新たに、①爆弾処理専門のインド人軍人、キップ（ナヴィーン・アンドリュース）と②戦前のカイロで英国情報部に出入りしていたカナダ人のカラヴァッジョ（ウィレム・デフォー）が登場し、硬軟折り混ぜた興味深いストーリーが展開していくので、それにも注目！

■□なぜこんなに面白いの？クライマックスは？■□

てなわけで、本作はとにかく面白い。途中で眠ることはもとより、スクリーンから目をそらすこともできないほど引き込まれていくこと必至だ。その要因の第1は、ストーリー構成の巧みさだが、それ以外にも、芸達者な俳優たちの見事な演技と美しい風景、そして複雑だが興味深い時代背景がある。北アフリカを舞台にした戦争を有利に導くためには、何よりも地図が大切。したがって、その作成は本来軍の仕事だが、そこに英国地理学協会なる民間組織がいかに関与していたの？

他方、「スパイものと美女」の本場(?)は『007』シリーズだが、本作はそれとは違う意味で「スパイものと美女」という要素も含まれているので、それにも注目！しかし、なぜあんなに元気に動き回っていたアルマシーがイングリッシュ・ペイシエントになってしまったの？本作冒頭でなぜ彼は後部座席にキャサリンを乗せてあの複葉機に乗っていたの？彼はどこへ行こうとしていたの？なぜ撃ち落とされてしまったの？

本作のクライマックスに向けては、それらすべての謎が解き明かされ、『ロミオとジュリエット』とは全く異質ながら、“これぞ純愛！”というべき“大人の愛”の姿が抽出されて行くので、それに注目！25年前に『シネマ1』で「アカデミー賞は当然。『風と共に去りぬ』と並ぶ名作。しかし少し難しいよ。」と書いた名作を、大スクリーンで再鑑賞できたことに感謝！

2022（令和4）年3月16日記